

〈安全な場所〉の崩壊

——「ゆく雲」に於ける手紙の意味——

峯 村 至津子

一 「ほころびが切れ」た心の行方

かつて「ゆく雲」を論ずる際に、『東京パック』第七卷第十七号（明治四四・六・一〇 有楽社）に掲載された一枚の絵を取りあげたことがあった^①。縫物に専念する女性と、書物を手にし、視線を宙にさまよわせる女性とを並べたその絵は、女性の対照的な生き方を描き出しつつ、同時に、当時の女性をめぐる認識をも、よく表わしていたと言える。縫い物に勤しむことが女の義務であるが、それとは異なる道を選び、学問をして、権利を自覚するような女性もいるのだ、ということがただ単に表わされているだけではなく、それぞれの生き方を選んだ女性の、各々の心のありように対する当時の認識までもが伝わってくるような絵であった。縫い物に余念のない女性の絵は、背景の色が薄いせいか全体的に明るく、この女性も自らの手許をしっかりと見つめており、その視線に揺るぎは感じられない。そのため、〈縫うこと〉（家事）主体の生活に不安を抱いているようには見え、極めて安定した印象の絵である。それに対してもう一方の絵の方では、本を手にしてはいるものの、女性の目は本の上には注がれておらず、空を彷徨い、焦点を結んでいない。背景の色の濃さとも相

俟って、全体的に不安定で暗い印象の絵となっている。ここには、常識的な生き方が精神的安定を、そこから逸脱するところが不安や恐れを、女性にもたらすであろうという認識が描かれていると思われる。そして、この絵に描かれているような不安や恐れの感情は、一葉自身が体験したものであつた。

注1の拙稿では、当時の女性を取り巻く規範の代名詞とも言える〈縫物〉と、学問との対立を意識する一葉自身の文章を二つ取りあげた。一つは明治二十二年の執筆と推定される雑記、もう一つは、明治二十六年、竜泉寺町へ転居して間もない頃の日記「塵之中」の、自伝的記述の中の一節である。両者は共に〈縫物〉に象徴される生き方と、そこから逸脱するものとしての〈文机に向かう生き方〉との葛藤を描き出しているが、その語り方にはある違いを見出すことができる。その違いとは、前者では、その葛藤が〈自分自身のこと〉としてではなく、「哀おのこならましかばとかこつも有べし」(ああ、男だつたらよかつたのに……と嘆く者もいるだろう)というふう²に、一般論的に語られていたのに対し、後者では、その葛藤は明確に〈自分自身のこと〉として語られているという点である。

前者の雑記に描かれている、女が何かを学んだり小説を書いたりしようとした時に、常に気兼ねしなければならぬ「人のいはんこと」(周りの人があれこれ言うであろうこと)、そういう世間の視線にさらされることによつて生まれる「うしろめた」さ。文壇デビューはまだ先だが、「小説などかくもよけれど」とあるように、〈小説家〉という道が視野に入ってきていた一葉は、それが、例えば次のような言葉と常に向かい合わざるを得ない道であることを、既に十分に意識していたに違いない。

(前略)殊に文学の道に入り、文壇に立つて男子と優劣を争ふが如きは最も避くべき事なり、通常の人情として女子の著作を輕蔑し、頓着せず、斯る待遇に逢はゞ男子と雖も堪へ難かり、況してや感情鋭き女子にしてなどか悲愁に沈まざるべき、(後略)

(香軒「女子文学者」『女学雑誌』第三二四号(明治二三・八・二) 女学雑誌社 一四頁。)

女が文壇に立つことで引き受けねばならない侮蔑と嘲笑。避けられない悲憤。そういうものを意識しつつ、しかしそれを日記というプライベートな場に於いても、〈自分の小説家志望とそれに伴う苦しみと不安〉といったかたちで書くことはなく、一般論的な記述でばかりしているこのときの一葉は、自分の内にある欲求を、どうにも抑圧しきれないものとして明確に認め、そのことを自分自身に突きつけようとする姿勢には、まだ欠けているように見える。しかし、「塵之中」の文章では、そういう姿勢が鮮明に打ち出されていると言つてよい。ここでは、自分の欲求のままに生きがたい「女の身」を嘆くというよりも、「されども猶夜ごとく文机にむかふ事をすてず」というように、学問を続けたいという自分の欲求の火が、家事と裁縫に明け暮れる日々の中でなお消えずに燃え続けたのだ、ということの方を強調する文脈になっている。ここには、常識的な生き方の中に埋没しきれなかった自分を肯定しようとする意図が、明らかに看取されるのである。

日記に於けるそういう変化を経て、注1の拙稿冒頭で引用した随筆「雨の夜」³では、〈縫うこと〉が身近にあった昔を恋う、という枠組みの中ではあるものの、〈縫物〉と隔たっている今の自分の日常を、公表する文章の中に描き出しているのは、次に示すような文章と同時代のものとして見た場合、注目してよいことである。博文館発行の岸上操『日用百科全書第四編 家政案内』（明治二八・八・二〇）には、女性がものを書くことと〈女子の本分〉についての次のような発言が見られる。

西洋のさる大学者の云ひける、「女子をして文学者たらしむるも、女子の数を減ずるのみにして、文学者の数を増すことなし、えうなき事にこそ」といへり、こは女子は普通の教育を受けて、人に嫁しては家を治むべきが当然なるに、徒らに女博士たらんと企る^{くわだつ}とも、多くはさせる大学者にも得ならで、女子の本分たる家政の道には、なかく疎くなれるが多きを誠めたる言葉ぞかし、

（一九一〜一九二頁。）

そこでは「我が邦の紫式部、英吉利のフラーセツト夫人など」「女子の文豪とも学者ともいへ」る人々にしても、著作そ

のものの価値によって評価されるのではなく、「女子の本分を尽し、女子たるべき道を守り、さてその上に文学にも勝れたれば」という、文学以前にまず「女子の本分を尽し」という理由によってかろうじて非難を免れ、そしてそういう二人には、「女子の英雄豪傑にして、非常の人といふべきのみ」というレッテルが貼られる（一九二頁）。その後続く文章では、これら〈非常の人〉と、〈われわれ普通の人〉との間の越えがたい溝が強調される。

（前略）吾も人も望むべき上かは、普通の人にして非常の人を学ばんとも、などか非常の事をすべき、已みなんかし、ゆめ女子たることを忘るべからず、それも専門に透すにあらず、好ける道を慰みのためとあらば、歌よみ文作る元より妨げあるべからず、ために本分の道を疎略にして、物語文章の品定めに裁縫洗濯を明日に延ばし、硯の水に心を奪はれて煮炊物の水加減に心とまらぬ事あらんを恐るゝのみ、

（一九二頁。）

これらの文章に照らせば、筆を執る日常の中で〈縫うこと〉と疎遠になっている一葉は、〈普通の人〉でもなく、かといって〈非常の人〉とも呼べぬ、中途半端な失格者ということになる。一葉が「にぎりえ」「十三夜」「われから」などの諸作を『文芸倶楽部』に発表してゆくのと同時期に、（そして『日本文学全集』は、一葉自身もこの翌年、その第十二編として『通俗書簡文』を執筆し、関わりをもつことになるシリーズであるのだが、）一方では、同出版社発行の書物に、女性が文筆を「専門に透」して「本分の道を疎略に」することへのいましめの言葉が並んでいた。こういう言葉が視野に入ってくるような環境に於いて、〈縫うこと〉に勤しんでいた昔の自分をいとおしむ、という枠組みの中であったとしても、〈私、女の本分から逸脱した日常〉を公にするためには、それ以前に自分自身の中で自分の生き方を確認し、それを肯定することが不可欠であったと考えられる。まず、自分の心と向き合うこと。一葉の中でそれが進行していたことを、「塵之中」の一節は明確に物語っている。

さて、注1の拙稿で論じたように、「ゆく雲」のヒロインお縫は、作品発表時の明治二十年代に於いて、かくあるべき

と説かれた生き方に自らをそわせ、家の平穩のために父母に尽くしてゆくことで、正直な心を封じ込めようとしていた。そうすることで、家の中で継母の攻撃を受け続けること、「うい事つらい事」を感じ続けることから、出来る限り身を遠ざけようとしたのである。「ゆく雲」では、そういうヒロインの「縫ひとぐめ」られた心に「ほころびが切れ」、感情が再び動き始めるところまでが捉えられている。はたしてその時お縫は、その完全に封じ込めることの難しい自分の心と、どのようなかたちで向き合ったのだろうか。もう一度「目を明」いて、「うい事つらい事」を身に引き受けて生きてゆく覚悟の時が、お縫に訪れることはあるのか。日記の中で先に見たような過程を経て、自分の欲求と向き合おうとした一葉であるが、小説の中のヒロインを通しては、自分の正直な心と向き合うというこの問題を、どのようなかたちで描いたのか。お縫の、「ほころびが切れ」た心の行方を追うというのがこの小論の目的であるが、その手がかりは、作品末尾に描かれている、桂次とお縫の間を通う手紙にあるというのが論者の考えである。

「ゆく雲」の手紙について、自説の概略を先に述べると、それは、桂次とお縫を結びつけるコミュニケーションの手段としては機能していないと言える。桂次に於いてお縫に手紙を書くという行為は、養家での〈窮屈〉〈不満〉と感じられる日々の中で、自分の思いを自由に解き放つ場を持つ、という意味を有していた。一方でお縫は、桂次からの手紙に現実的な意味での〈返事〉を書くことを想定していなかった。彼女にとっての桂次からの手紙は、一人それを読むという行為の中で、自らの感情の動きに安心して身を委ねることができ、そういう境地へ誘ってくれるものとして意味を持ったのである。二人には、今の現実を動かそうとする強い思いはなく、だから、手紙はそういう思いを託されて劇的展開を準備する起爆剤とはなり得ない。二人にとっての手紙は、ただ、それを読んだり書いたりする行為の内に閉じこもるための〈安全な場所〉でしかない。だからこそ、〈手紙が途絶える〉ことが、この作品に於いて描かれる意味があつたのである。論者は「ゆく雲」に描かれた手紙を以上のように解釈する。そのように読む根拠を本論に於いて示し、その上で、前段落で

提示した疑問点についての考えを示したい。

二 不自由さと緊張と——手紙の性格——

さて、論者は先に、「お縫は、桂次からの手紙に現実的な意味での〈返事〉を書くことを想定していなかった」と書いた。ここではその前提として、若い男女の間で取り交わされる手紙が、当時どのように捉えられたか、という点についてまず見てゆくことにする。

一葉文学に親しんでいる者にとって手紙といえば、一葉自身が半井桃水や久佐賀義孝、馬場孤蝶らに宛てて書いた数々の手紙を連想しがちである。実生活の中で様々な思いや思惑を手紙に託した一葉は、手紙というものを使いこなせた人と言えるだろう。が、手紙を書くという一つの行為を考えるにしても、戸主として一家の生活を担い、小説家として一人で立とうとする分、父親や夫の目に縛られることのなかった一葉と、彼女が描き出した小説の中の、家の中で生きる女性達とを同列に見ることは出来ない。菅聡子氏は、「書き手の身の置きどころとは無関係にはるかな距離と空間を飛びこえる機能を持つ手紙は、ことに〈家〉の内部から容易に外へ出ることのできない明治の女性達にとっていわば唯一のコミュニケーションの手段であり、「手紙は単に用件を伝えるだけのものではない」^⑤く、「その身を気促にできない女達にとってまさに「真心」の伝達手段であった」と、その重要性を強調している。しかし、例えば菅氏が根拠としてあげている『女学雑誌』第三四号（明治一九・九・五）所載「女のふみ（下）」の、「女の文は（中略）たゞよく其真心をあらはすことぞ最上の心得なるべし」（六三頁）という言葉が、実は「母娘妻などが其親か夫か又は子供に送るときの文につき心得の大抵を示したるなり」（六五頁）といった限定付きのものであったように、手紙が、常にどのような相手に対してでも、自分の気持ちのおもむくままに「真心」を吐露し、それを発信出来るというほど、すべての女性にとって、平等に

自由なものであったとは言えないのではないか。右の引用部の直後には、「友達の文は以上の心得を基^{もと}としたぐ礼と云へる一字をよく心にとめて認め玉ふべし」（「女のふみ（下）」、六五頁、圈点原文のママ）と記されているが、当時の家の中の女性たちが、「真心」を伝える文通相手として、男性の友人を想定し得たかどうか。

手紙とは、読み手と書き手の間にとどまらず、それを取り巻く人々の心までも波立たせる可能性を常に備えているという意味では、極めて不自由なものでもある。^⑥注6に示した例のような、男女のつきあいや手紙のやりとりで神経質にならざるを得なかった、一葉の同時代人の証言を見る限り、「ゆく雲」が書かれた時代に於いては、お縫に手紙を書く気持ちがたとえあつたとしても、彼女の方から桂次に宛てて頻繁に手紙を出すということは、極めてしにくいことであつたに違いないのである。

それでは、「ゆく雲」の手紙について考察する前に、この時代の女性たちにとって、手紙というものがどういうものとして意識されていたのか、その具体的なイメージを立ち上げてみることにしよう。

① 手紙をめぐる規範

一葉が執筆した書簡文範『通俗書簡文』（『日用百科全書第十二編』明治二九・五・二五 博文館）は、女性同士が日常取り交わす書簡を想定して書かれたものである。そのことは、同書所収の一葉の解説、「唯いさゝか」の中の、次のような言葉に明らかであろう。

（前略）男子の書くなる拝啓、頓首も我がしらぬこと、唯我れどちの間にいひ通ふ日用文のこと少し言はんとなり。（後略）

（『日用文のこと』『樋口一葉全集 第四卷（下）』（一九九四・六・二〇）七七九頁。）

男性のことは関知するところではない、という発言の後の「唯我れどちの間にいひ通ふ」という言葉は、（ただ我々女同

士の間で言い交わす」という意味になるはずである。実際、『通俗書簡文』に収められている書簡文例は、家庭の妻や娘が、親しい女性の友人や知人、或いは近親者に宛てて書いたもの、という設定になっている。

「日用文のこと」では、その女同士の手紙について、「年始暑寒のとひおとづれより、月花の折に友を誘ひ、新宅新居をいはひもし、憂ひ歎きを慰めもしつ、親しき中には忠告教誡、唯まのあたりならば、とあり、かゝりと口にすべきを筆にいはせて心かよはさんまでの業なり」（同右）というように、日常のつき合いの中で、互いを思いやる気持ちを託すものとして位置づけているが、それに対して女と男の間で取り交わされる手紙については、注意を要するものとして別に扱っている。「わかき男に用ある折の文ことさらに慎しまずはあるべからず」（七八一頁）といった文言からは、（女から若い男に文を送るのは用事がある時に限られ、その際も馴れ馴れしく書くことは控え、殊更に謹んで書かなければならない）といった注意が発信されている。同じく「唯いさゝか」の中の「宛名」という項でも、女同士の手紙と女から男への手紙は明確に区別される。

（前略）何の何がし様と姓名ひとしく書くは謹める折のことなり、（中略）若き男にいひおくるには人のも我れのも名のみ書くべからず、姓名あきらかと言ひ伝ふるは親しみに似て打とめかしければなるべし、大かたは苗字のみにてもありぬべくや、女友達の親しき中には何子様御もとに、何子とばかり書きたる、いとよし、（後略）（七八三頁。）

親しさを強調するのが望ましい女同士の手紙に対して、（若い男に書き送る文では、宛名も自分の署名も、名前ばかりを書いてはならない。姓名共に明らかに書くように、と言ひ伝えられているのは、名前ばかりを書くことが、いかにも親しい間柄で心を許しているらしい感じになるからであろう。）というように、ここでは打解けすぎぬよう常に警戒心を持つことが要求される。小説とは異なる、日常用いる手引き書としての書簡文範執筆にあたっての一葉は、「若き時は、夫の親類・友達・下部等の若き男には、打ち解けたる物語りし、近づくべからず。男女の隔てを固くすべし。如何なる用有りとも、

若き男に文など通わすべからず。」(『女大学宝箱』) といった女大学的な規範(7)に身をそわせて発言していると言つてよい。『通俗書簡文』の時代に於いて、女と男が取り交わす手紙は抑圧の対象となるものであった。女が男に手紙を書くことは、「唯いさゝか」にも取り込まれているような〈良識〉の前で、不自由な行為とならざるを得ない。だが強い規範に取り巻かれているからこそ、男と女の中にあつて、手紙は劇的展開を生む装置となり、不自由だからこそ、その中で書いたりと送つたり或いは読んだりすることが、その背後にある並々なぬ思いの強さを表現するものとなり得るのである。

② 行間に書かれた手紙

〈手紙〉は文学の中でどのように描かれたであろうか。

恋とはそうしたもののか、そんな中でも、美妙へは消息していた。手紙では人目が煩(うづ)さいので、書籍の行間に、切ない思いを書き入れては送った。

長谷川時雨による評伝「田沢稲舟」の末尾近くで、美妙と別れ、郷里へ帰ってからの稲舟の心情を描き出そうとしている箇所からの引用である。「事あれかしの世間」が美妙と稲舟の「破綻を呵責無く責め」る中で、「そうまでされても美妙をかばった」稲舟の「切ない思い」。評伝の締めくくりの部分で、それを端的に表現するために時雨が選び取ったのは、書籍の行間に書き入れてゆくという変則的な書簡のかたちであった。ここでは、通常の手紙が書けずに、書籍の行間に思いを書き込むという行為が描かれることによって、ただでさえ「切ない」稲舟の「思い」が、その行為のためにより増幅されるであろう様子を表現することが可能になる。そうまでして別れた夫に思いを伝えようとする稲舟。稲舟の死というクライマックスを描く直前に、心の緊張の最後の糸を「張り切っていた」稲舟の思いを、時雨は書籍の行間に書かれた手紙に託して表現したのであった。

そもそも手紙とは、携帯電話での会話や電子メールでの送受信など、現代用いられている通信手段とは異なり、その個々の通信そのものが明確な物体の形をとって人目につきやすく、また後々まで姿を留めるものでもある。確かに燃やせばなくなるが、それとても、容易な操作で一瞬にして削除するようなわけにはいかない。燃やしているところを、見られてはならない人に見られてしまったら、たとえばつきりと中身を読まれていなくても、それがきっかけで問題が出来る可能性は大いにあり得る。連絡を取り合う者同士以外の第三者に、知られないようにしようと思えばすることが比較的容易な現代の通信とは異なり、手紙はどうしても人の目に触れやすく、またそうであるだけにいつそう、送る者と送られる者との関係が公に認知されにくいような場合、その扱いには注意を要することになる。そして、気軽に送れないこと、(細心の注意を払わねばならぬ)ということは、送り手の心情に或る影を投げかけるはずである。注意を払うということによって、自分と相手との関係のもろさ、危うさを再確認させられたり、そうまでも手紙を送りたいと思ってしまう自分の気持ちを、改めて思い知らされたりすることが起こり得るからである。

③ 匿名の手紙、書かない手紙

こうした手紙の不自由な性格を反映して、一葉小説中には、〈世の人の許さぬ仲〉の男女間をつなぐ、実名を隠した手紙が描かれることがある。

夕暮の店先に郵便脚夫が投げ込んで行きし女文字の書状一通。(後略)

『樋口一葉全集 第二巻』(一九七四・九・一〇)一五九頁。

「裏紫」(『新文壇』第二巻第二号(明治二九・二・五 文学館))の冒頭で、ヒロインお律の家に投げ込まれたこの書状は、実はお律の結婚前からの恋人、吉岡からの呼び出し状である。(女文字)というのは、お律の夫や店の使用人たちの

〈安全な場所〉の崩壊

目を避けるための工夫であり、お律は、それを姉からの呼び出し状だと夫に偽って出かける。お律、吉岡の二人が、そうした小細工を弄しても逢おうとするのは、「良人を持たうと奥様お出来なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いた」（一六二頁）という二人の関係があるからであり、「私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい」（同右）という強い思いがあるからである。

しかし、西洋小間物店を営むお律の家のような、夫が外に働きに出ておらず、お律の行動が夫の目を避けることが難しいという場合、いくら〈女文字〉ではあっても余りに頻繁に手紙が来れば、不審を招きかねないことにもなる。また、「裏紫」未定稿Ⅷには、吉岡を訪ねたお律の言葉として「あれもこれも伺ひたけれど人目が多さに文をも上げがたく、此半月ばかりは夜もろく／＼と睡りませぬ」（一六六頁）という叙述があり、いつも家の中にいて、夫、使用人などの目にさらされている家庭の女性にとつての手紙は、誰に対しても自由に思いを綴れるというほど便利なものではない、ということが描かれている。

「十三夜」に於いても、原田家に嫁いだ後、お関がかつて結婚を夢見、嫁入りの「其際までも涙がこぼれて忘れかねた人」（同全集一一三頁）である、録之助に対して手紙を書くことはなかった。結婚生活に破れ、憂き思いを抱えて何年も生きる中で、お関が、失われた録之助とのもう一つの結婚生活を思い浮かべることがなかったとは考えにくい。しかし、再会した録之助に「私も昔しの身でなければ種々（いろいろ）と障る事があつてな、お尋ね申すは更なること手紙あげる事も成ませんでした」（一一〇頁）と言っているように、お関が自分の境遇や思いを手紙に託して録之助に書き送ることはなかったのである。お関には再会するこの日まで、録之助の所在を知る機会もなかったわけであるが、それを知っていたとしても、彼女が子どもと実家のために夫に服従し、原田家で堪え続けようとしている限りは、手紙を書くことはしにくかったであろう。「嫁入りてより七年の間」「一人歩行して来るなど悉皆ためしのなき事」（一〇〇頁）というように、里帰りにいつ

も「女中」を「連れ」ていた（九七頁）お関は、家庭の中にいるからこそ、一人きりの自由な時間を持つことは難しい。また、①で見たような〈良識〉に照らせば、出奔↓駆け落ちというような覚悟がある場合であればともかく、そうではなしに、ただ自分の苦しい心境を、別れた幼なじみの男に縷々書き送るというのが、極めてしにくいであろうことも想像される。のんびりしているようでその実、常に人目にさらされている家庭の中の女性にとって、〈良識〉から逸脱するような手紙は、書きたい時に書きたいことを書けない、誠に不自由なものとして描かれてきたのであった。

④ 開封されない手紙

一葉の作品の中には、ヒロイン宛の恋文が開封されないまま、ただそれが保存されてゆく、ということが描かれることがある。このヒロインによって隠された手紙の束は、二つの意味を秘めて存在していたと言える。

「暁月夜」〔『都の花』第二〇一号（明治二六・二一・一九 金港堂）の場合をまず見てみる。華族香山家の令嬢一重（ひとえ）に心ひかれ、「恋の奴」（第一回、『樋口一葉全集 第一巻』（一九七四・三・二〇）（二三五頁）と化した文学書生森野敏は、名を吾助と偽り香山家の庭男として住み込んだ。彼になついてくる、九才になる香山家の次男甚之助に託し、彼は一重に恋文を届けることを目論む。文を託す際、敏は、甚之助に対し「無心の処何とも気づかはしく、落さぬやうに人に見せぬ様にと呉々をしへ」（第三回、二四二頁）たとあるように、文が人目に触れぬよう配慮し、託した後も「はじめての艶書（ふみ）に心をいためて、万（もし）一落ち散りもせば罪は我れのみならず、知らじとて令嬢（ひめ）も免るされまじ、さらでもの継母御前如何にたけりて、どの様の事にまで立いたるべきか」（第四回、二四三頁）などと思ひ悩んでいるように、恋文の発覚は重大事として描かれている。それだけでなく、「もとより蓮葉ならぬ令嬢（ひめ）の、殊に我れ庭男などに目の付く筈（はず）なければ、最初（はじめて）より艶書（ふみ）と知りては、手に触れ給ふか否か其処まことに危ふし」（第三回、二四二頁）という心配もしなければならなかった敏

は、「半紙四五枚二つ折にして、墨つぎ濃く淡く文か有らぬか書き紛らはし、態と綴ぢて表紙にも字を書き」というように、手紙らしく見えぬよう、外見に「趣向」を凝らしてもいる（同右）。①で見たような規範に取り巻かれている女性に恋文を無事に届け、読ませるのも一苦勞であることが描かれているわけだが、敏の「趣向」はひとまず功を奏し、甚之助から「歌」だと言つて手渡されたそれを、一重は「何心なく開らきて」読もうとする。しかし「一二行よむとせしが、物言はず疊みて手文庫に納めれば」（第三回、二四三頁）とあるように、恋文だと気付いた彼女は、それをつき返すことも、焼き捨てることも、返書を送ることもなく、恐らく最後まで読むことさえなかった手紙をただ保存する。「夫より後の幾度幾通かき送りし文に一度の返事もなく」（第四回、二四五頁）、しかし一重は「貰ひし文は何処までも惜しきに、封こそ切らぬ手文庫に秘めて、一生の際までは友とせん心」（第五回、二四九〜二五〇頁）という思いで、開封しない手紙の束を大切にしていた。不義の子という自らの出自から、恋を「不幸の由来」として、生涯「独りずみの願ひ固く」決意している（第六回、二五二頁）一重にとって、敏からの恋文を未開封のままにしておくことは、その誓いを守っている自分、規範から逸脱していない自分を確認する砦であつたと言えよう。そのうえで、「文を抱きて幾夜わびしが」（同右）とあるように、未開封の手紙を持っているということが、このヒロインにとっては、あり得たかもしれない別の生き方の可能性を夢想させるという意味を持ったのである。一人鎌倉へ赴くことを決めた彼女は、「恋は一人ぞ安かりける」（同、二五三頁）という境地に閉じこもろうとしていた。父母の不義の恋を「不幸」と捉えようとする一重は、恋と現実的に関わることから身を遠ざける。現実には一線を踏み越えていないことを確認しつつ、同時に空想の中では、そこから逸脱し、恋に生きる可能性に思いを馳せるために、その両方を満たすものとして〈開封されない手紙の束〉を彼女は求めたのである。

「軒もる月」（『毎日新聞』明治二八・四・三／四・五）のお袖が、かつて小間使いとして仕えていた桜町の殿からの恋文十二通を、未開封のまま葛籠の底に秘めていたことについても、関礼子氏が指摘するような「手紙のなかでもとりわけ

封書」の「非公開性が、受信者に対する発信者の関心の高さ、メッセージの主題の強さを物語る」ということだけではなしに、これまで見てきたような当時の女性と手紙をめぐる状況の中でも、その意味が考えられなければならないだろう。ただでさえ、男女間で手紙を取り交わすことに對する強い制約がある中で、妻が、夫と子供との生活を営む場所の中に、別の男からの恋文の束を隠し持っていることの重み。それを思つてこそ、夫の帰宅を待つ時間の中で手紙を読む、というお袖の行為が、この上ない緊迫感をもつて迫ってくるのである。そしてお袖が手紙を開封しないのは、「大恩の良人」(『樋口一葉全集 第一巻』四八〇頁)と「愛らし」と感じる(四八一頁)我が子とがありながら、「二タ心を持ちて済むべきや」(同右)という思いがあるからであり、しかし一方で手紙を始末することも出来ないでいるのは、「夢に天上に遊べると同じ」(四七九頁)と桜町家での日々に未練を残す彼女が、今の日常の中でも「果敢なき楼閣を空中に描く」(四八〇頁)ことをやめないでいる限り、「裏屋」(四七九頁)での暮らしと〈天上での日々〉を繋ぐ縁よすがを欲しているからである。

「暁月夜」「軒もる月」いずれの場合も、〈開封しない手紙〉とは、道徳的規範を意識する女性が、それを破ることのない一線を確保しつつ、自分の中に抑圧した思いをひそかに解き放つ場所を持ったためのものであったと言えよう。だが、二つの作品の違いは、お袖が、「今日まで封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる浅はかさよ、(中略)身の行ひは清くもあれ心の腐りのすてがくば同じ不貞の身なりけるを」(四八一頁)と、そうした手紙の意味を意識し、手紙を読み、それを焼き捨てるという行為によって、自ら現状を変えようとする動きを見せるところに見出すことができる。

⑤ 手紙が引き起こす劇的展開

男女のつき合い方に関わる規範の存在と、手紙の人目につきやすい不自由な性格とから、人目を憚る手紙が劇的な展開

II ドラマを誘発するきっかけとして、文学の中にしばしば描かれることがある。

南翠外史「常陸帯」(『小説百家選』第八卷(明治二七・六・三 春陽堂)第二十回「折檻」では、娘が手紙を隠し持っていたことで、父親から折檻を受ける場面が描かれている。ヒロイン阿為^{おため}が袂に隠していた文は、実は彼女に懸想している華族の御曹司勅使河原輝業^{てるなり}の婚約者、淑子からの文であったが、それを見た父伝兵衛は、輝業からの文と思い激昂する。「今までツイぞお前の処へ誰からも手紙の来た事はないが見れば優しいその手跡一体何処から届いた文だと鋭く問」い、「親の目を偷^{ぬす}んで忍び男を拵^{ぬす}へる」「不埒な女」「不義の文」と決めつけ、火箸で打ちするなどの暴力を娘に加える(一二〇〜一二二頁)。「然らでだに物むづかしき伝兵衛」(第二十一回、一二二頁)という性格付けがなされている人物ではあるものの、「只^{ただ}一通の其手紙親の目に見せられざアモウよし親子の縁は是まで」(同、一二三頁)と言う伝兵衛の隠された手紙に対する執着は、①で見たような規範と無縁ではあり得まい。^①

阿為にかかった嫌疑は濡れ衣で、それは実際には「不義の文」ではなかったわけだが、そもそも人目に触れやすい手紙が引き起こす騒動は、文学の中に数多く描かれてきた。女三宮と柏木の密通の露見は、宮を見舞った源氏が、しとねの下に不用意に置かれていた柏木の筆跡も鮮やかな文を発見する、というかたちで描かれていた(『若菜下』)。また、近松門左衛門『山崎与次兵衛寿の門松』中之巻では、新町の太夫吾妻が与次兵衛の家の中に投げ入れた手紙が、「ア、誰がひろはふもしいで女房の有男の屋敷。遠慮もないとひらけば見しつた候べく候。朧月にも見ちがへぬあづまが筆」と、妻お菊の手で拾われ、読まれることで、妻と遊女の互いの思いがぶつかり合う場面へと繋がってゆく。^②

明治期に於いても、妻のある男の家に恋文を郵送したとしたら、女性が家の中にいることが普通であるこの時代、その手紙が妻の手に渡ってしまうことは十分に考えられることであろう。しかしそうなった時に、妻が心を解いて夫と女を引きあわそうとするという、近松の浄瑠璃のような展開(注11参照)が、一葉の作品に現われることはない。「にぎりえ」

に於いて、夫源七の心をとらえ続けている酌婦のお力を恨むお初が、お力の心中の思いに触れて心を解くというような展開は見られない。逆にお力がお初と源七の子、太吉に買い与えた「かすていら」がきっかけで引き起こされた口論のあげく、源七の家庭は一家離散の破局を迎える。作品冒頭から、妻お初の目に触れずに確実に源七の手に渡りするような（人づての手紙¹²）を送るようお力に勧める、朋輩お高の言葉が描かれていた「にぎりえ」では、お初の恨みや嫉妬を氷解させ、お初とお力の心を結ぶきっかけとしての手紙を一葉が登場させることはなかった。¹³

そして「ゆく雲」に於いてもやはり、手紙はお縫と桂次の妻お作の心を結ぶきっかけとして働くことはない。それだけでなく、「ゆく雲」の手紙は、手紙を取り交わし合う者同士お縫と桂次の心を結びつけるものでもなかった。「ゆく雲」に於いて手紙は、どのような役割を果たしているのか。

三 桂次からお縫へ——一方通行の手紙——

「ゆく雲」に於いて、郷里に帰った桂次からお縫へ送られた手紙は、二人を結びつける意思疎通の手段とはなり得なかった。それは、桂次の方から（お縫）への自分本位の思いを吐露する、一方通行のものとしてあったのである。

前章で見たような、女性から若い男性に対して手紙を送る事へのいましめと、手紙そのものが持つ不自由な性格とから、お縫の方から桂次に宛てて、桂次の思いに対する自分の気持ちや、自分が日々心中に抱えていることなどを、赤裸々に吐露するような手紙を書くことは、かなりの覚悟を必要とする。年に一、二度の時候の挨拶程度のものならばともかく、結婚している男の許へ（そしてその家には男の妻が常にいるはずである）、自分の心底を告白するような手紙を送るとなれば、その先に何らかの「やかましき沙汰」（『樋口一葉全集 第一巻』五〇四頁）が出来することを覚悟の上で行動しなければならぬだろう。郵送した場合、その手紙が桂次の妻お作の目に触れる可能性は誰でも想定できるはずであり、もし

もそうだった時には、「上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし」(同右)といった状況は俄に緊迫した様相を帯びだすことになる。〈姦通〉といった疑惑の渦中に巻き込まれていくことへの覚悟無しに、桂次に親密な手紙を送ることは考えにくいのであるが、家の中で今まで通りの日常を送ろうとしているお縫に、そうした覚悟の時が訪れているようには読めない。また、この時点でのお縫が、お作に見られることなく確実に手紙が桂次の手に落ちるよう人づてで送る、或いは筆跡や署名を男に偽るなどの策を弄するというようなことも考えられない。何らかの策を弄するとしたら、その行為は、妻を持つ男に対して積極的に働きかけるといふ特別な意味を帯びてしまうことになる。この場合、お縫がそこまでするためには、まず、彼女の中で桂次に対する強い感情(恋情)が意識されるか、或いは、今の生き方から抜け出したいというような、何かやむにやまれぬ思いに彼女が突き動かされるか、等の事態が存在しなければならぬ。しかし「相かはらず」両親の顔色をうかがい、「我身をない物にして上杉家の安穩をはか」っている(五〇八頁)お縫の心が、そこまで激しく動いているようにも読めない。

桂次が郷里へ去ってから、生涯手紙を絶やすことはしないとの誓いに反して、さほど時を経ぬうちにお縫への手紙は減り始め、ついには「年始の状と暑中見舞」だけになる。しかし手紙が途絶える理由を、お縫が桂次からの手紙に〈本当の意味での返事〉を書かなかつたことに求められるというほど、事は単純ではない。ここで論者の言う〈本当の意味での返事〉とは、最初の頃の桂次からの手紙に「こと細かく(五〇七頁)書かれていたに違いない、お縫への彼の思いに対して、彼女の方からも自分の気持ちを桂次に向けて語ったもの、という意味である。そもそもはじめから、お縫が郷里へ去った桂次に〈本当の意味での返事〉を実際に書くということとは、桂次にとってみても想像しにくいことであつたはずである。前に述べたように、妻がいる男に向かって自分の内面を事細かに打ち明けるような手紙を、妻がいつも共にいるであろう男の家に送るといふことは、当時の感覚ではよほどのことがない限り考えにくい。しかし、帰郷前の桂次の眼には、

自分がいくら気持ちをつけても、それに対してはかばかしい反応を殆ど示さないお縫の姿がいつも映っていたのであるから、お縫からの返事がないことを承知の上で、彼は、「我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゞざるべければ、君よりも十通に一度の返事を与へ給へ」(五〇六頁)と言っていたに違いないのである。

桂次の軽薄さとそれを揶揄するような語りについてはこれまでも論じられてきた。⁽¹⁵⁾ここで、彼がどのように描かれているかを、先行研究で言及されていない点も含め、辿っておきたい。そもそも桂次は、いつも正直な自分の気持ちをお縫に伝えているつもりであつたろうが、彼がお縫のことを十分に理解できていたかという点、それはまた別である。(上)末尾の、次の一節を見ると、

(前略) 父母そろひて家の内に籠り居にても済むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばるゝは大方お俠の飛びあがりの、甘やかされの我まゝの、つゝしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはさかる心ありて万ひかえ目にと気をつくれれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故郷のお作が上まで思ひくらべて、いよくおぬひが身のいたましく、(後略) (四九八頁。)

とあるように、桂次が、自分の許婚である養家の娘お作とお縫を比較し、お作との違いを見出して、お縫に同情を寄せていることがわかる。引用部前半では、「人目に立つ」「才女」などと呼ばれるような活潑な女性に対する批判が語られているが、この文が引用部後半で桂次の心情に収斂してゆくところから、この批判は桂次の心内語をなぞっているものとして読める。批判的な言葉がたたみかけるように重ねられているところも、思いこみが激しく感情的な桂次の言葉を思わせる。桂次の脳裏に浮かんでいる「人目に立つ」「才女など呼ばるゝ」「我まゝ」な娘とは、傍線部よりお作を想定していることになるが、「相応に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せさして」いた「十歳ばかりの頃」のお縫(四九九頁)が、継母の抑圧を受けることなく、もしもそのままに成長していたとしたら、その姿は桂次が批判的に語っているこのお作の姿と、意外に近いものになっていたかも知れないのである。注1の拙稿にて見たように、ここで桂次が同情

を寄せる、「万よろひかえ目にと氣をつ」けているお縫の姿が、実はお縫の実像ではないことが、この作品には描き込まれていた。「我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱はげしけれども」（五〇四頁）と語られるように、情熱的な態度でお縫に自分の気持ちを訴える桂次ではあったが、しかし彼の中では、現に目に見えている、「身を無いものにして勤める（五〇〇頁）そのお縫の姿ばかりを見、彼女に同情することが目的化している。

お作との差異に於いてお縫を見ようとする桂次にとって、お縫は、定められた将来とは違う人生を束の間夢想させる存在としてあった。養家を離れての自由な東京での日々の中で、「造酒家の大身上」を継ぐ自分の「行く末をも鎖りにつな
がれたるやうに」感じ、「国を出るまでは左まで不運の縁とも思はざりし」お作との結婚も不服に思えてきた（以上四九六頁）彼にとつて、お縫の継子としての「氣苦勞を思ひや」り（四九八頁）、「あはれなるは継子の身分にして、腑甲斐ないものは養子の我れ」（同右）というように、お縫の立場に自らの境遇を重ね合わせることで募つてゆく同情は、お縫に向けられているようでありながら、その実それは桂次自身に向けられていたと言える。もしも彼が故郷を捨て、お縫と一緒にすること、浮世の義理に背いても本当に自分の人生を変えようと思うならば、それは生半可な覚悟では済まないことになる。しかし、お縫の「ゆく末を守り玉へと」観音様に祈り（五〇四頁）、自分以外の他の男と結婚し、出産する将来のお縫の姿を話題にする（五〇六頁）彼の姿からは、人生をかけてまで、何としても彼女と一緒にしようと努力する様子は読み取れない。

見せかけのお縫の奥に潜む彼女の実像を見つめようとしなない桂次が、自分の思いに反応して面倒を起こすようなお縫の姿を想像することはなかったに違いない。だからこそ彼は、思う存分自分の気持ちを熱く語る事が出来たとも言える。ルールを敷かれた将来、窮屈と感じられる日々の中で、東京で出逢つたお縫に向けられた桂次の言葉は、養家の目が届かないところで、自分の思うがままに思いを自由に解き放っているという感覚をもたらすものであつたのだろう。郷里に

帰ってからしばらくの間送り続けられた手紙も、その延長であつた。しかし、もともと上京前は自分の身を不運とも思つていなかった桂次が、郷里の暮らしに次第になじんでゆくのにそう時間はかからなかった。「昨日あはれと見しは昨日のあはれ、今日の我が身に為す業しげゝれば、忘るゝとなしに忘れて」(五〇七頁) ゆくにつれて、桂次はお縫に対して言葉を送る意味を見出せなくなつてゆく。このように見たとき、仮にお縫が自分の「真心」を手紙に託したとしても、桂次の方がそれを受けとめ、二人が心を通わす機会が訪れたかどうかは疑わしい。桂次にとってお縫への手紙は、お縫の心を慰めるためのものというよりも、もつと自分本位のものであつたのである。

四 〈安全な場所〉の崩壊——お縫にとっての手紙の意味——

かつてのお縫は、死にたいと願うほどつらい自分の状況を、亡き実母の墓前で泣いて訴えた。しかし、現実には母が答えてくれるはずもなく、その訴えは一方通行のものでしかなかった。その後の「身を無いものにして闇をたどる」(五〇〇頁) ようなお縫の人生の中で、桂次との別れ際の、彼女のつらい日常を察してくれる彼の言葉が、孤立無援であつたお縫の心に触れたであろうことは注1の拙稿に於いて述べた。そして論者は、この時にお縫の心に「ほころびが切れ」かけたと解釈した。それは、帰郷した桂次からの手紙を「うれしく見」、手紙が減り始めるとそれを「恨」んだ(五〇七頁) というふうに語られるお縫の心情が、かつての、「桂次が親切はうれしからぬに非ず、(中略) 心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども」(五〇〇頁) と、〈嬉しくないわけではない、有難いことではあるが、……〉というように語られていた、冷静で消極的な状態からは一歩進んでいることがわかるからである。「岩木のやうなるお縫」(五〇六頁) の内部には、確実に変化が生じ始めていた。父と継母に対する身の処し方は変わらずとも、桂次からの手紙を読むという行為の中で、お縫は、これまで封じ込めてきた自分の感情の動きを、再び感じることの出来る時間を持ち始めていたのである。

菅聡子氏は、桂次との別れ際に涙をこぼし、「お縫の閉ざされた心が」「融けはじめた」時、「物語を綴る契機が彼女の中に確かに芽生えていた」として、このまま桂次からの手紙に接し続けていたとしたら「お縫はやがて〈読み手〉から〈書き手〉へと変貌しただろう」と述べている（菅氏論文、三八頁）。菅氏の言う、「お縫の日常は表面上変わらなかった」としても、「彼女の心はひそかに物語を綴り始めていた」（同右）という点については異論はない。しかし、更に考えておきたい問題は、本論に於いて見たような当時の規範の中で、お縫が心の中で書き綴る手紙が、現実の手紙となって桂次のもとに届く、ということは容易に実現しないということ、表向きの生き方を変えていないお縫も、郷里でのレールの敷かれた人生を選んだ桂次も、現実にお縫が桂次に宛てて事細かな自己告白の手紙を送る、といったことを考えていないのではないか、ということである。「桂次に手紙を〈書く〉」という行為は、お縫にとって初めて自らと向きあい自らを確認し自己を語るという行為を意味した」（菅氏、三八頁）というよりも、まず自らの心と向きあい、自らの生を確認したうえでなくては、お縫には自らを語る手紙を書くことはできなかったと思われる。

本論二章で見たように、女性の置かれている状況が不自由であった時代に、女性にとっての手紙も、自由自在にいつ何時でも思いの丈を綴れる、というものではあり得なかった。そして家の中にいる女性が、男性からの手紙を受取ることにも、周囲の人々の目が光っていた。しかし、その不自由さや緊張感の中で、いやその不自由さや緊張感があるからこそ、それを逆手にとつて、一葉小説のヒロインたちは、〈手紙〉というものをよすがとして、自らの思いを自由に羽ばたかせる時を持とうとした。手紙は、女たちの生に緊張をもたらす格好の媒体であったと言える。

しかし「ゆく雲」の手紙は、「暁月夜」や「軒もる月」ほど、葛藤や緊張を、ヒロインにもたらしているとは言えない。「ゆく雲」では、お縫が自分から手紙を送ることは不自由であったとしても、桂次からの手紙を受取ることに関しては、障害があったようには描かれていない。「身を無いものにして」生きてきた彼女の、これまでの桂次に対する「岩木のや

うな」身の処し方が、上杉家の父母の疑いを封じたとも読めるし、或は、親たちの心が（疑惑↓心配）というふうに動かないほど、お縫の存在がこの家庭で無視されているとも読めるが、ともかく、桂次からの手紙はお縫の手許まで届けられた。桂次も、親たちも、誰一人「やかましき沙汰」の出来など、予想だにしていけない。そういう、現実には何も動き出さない、という安心感のもとで、お縫は、桂次からの一方通行の手紙を読むというそのひとときだけ、自分の感情を抑圧せず、すむ時間を持っていたのである。上杉家では、桂次の在京中にも、お縫の物堅い身の処し方によるためか、二人の関係について特に問題視されていた様子はなく、そして桂次帰郷後のお縫の中にも、彼からの手紙を読むことに對する後ろめたさや葛藤が見出せないことから、彼女としては、家の中で非難を浴びることもなく、よって、規範から逸脱しているといった意識に強く苛まれることもなく、ただ（昔なじみの手紙を読む）という（安全な場所）に閉じこもろうとしていたと読める。

桂次からの手紙が途絶えなかったとしたら、（安全な場所）から、なかなか足を踏み出しそうにない、登場人物たちの様子を見る限り、葛藤が飽和状態に達して自ら手紙を燃やし尽くした「軒もる月」のお袖のように、お縫の変貌（新たな展開）の時は容易には訪れないであろう。しかし、お縫の心の支えとなり得るような桂次からの手紙は途絶え、お縫は安住しようとしていた場所を失う。最後に、敏から自分の身を遠ざけ（安全な場所）へと姿を隠す、「暁月夜」の一重とは逆に、「ゆく雲」に於いては、（安全な場所）が崩壊したここに於いて初めて、「ほころびが切れ」た心と、自分の感情を抑圧することに失敗した経験とを抱えて、自分はこれからどう生きていくのか、という問いに、お縫が一人で向かい合う可能性が開けてきたと言えるのではないか。桂次からの一方通行の手紙にささやかな喜びを見出すといった他力本願ではないかたちで、彼女が自分の心と向き合う時——その訪れを予感させて「ゆく雲」は終る。

「ゆく雲」という作品としてはそれ以上追究されなかった（お縫のそれから）の問題は、自らの心と向きあい、それを

捉えることが如何に困難であるか、という問いかけとなつて、一葉の他の作品のヒロインの中に、かたちを変えながら受け継がれてゆくことになるのである。

注

- (1) 拙稿「縫うこと、綻びること——一葉作『ゆく雲』の基層にあるイメージについて——」『女子大國文』第二三〇号（平成二三・一二・二〇 京都女子大学国文学会）八〇—一頁参照。
- (2) 同右、六〇七頁、及び、二三頁参照。『樋口一葉全集 第三卷(下)』（昭和五三・一一・一〇 筑摩書房）五七一—五七二頁、同全集『第三卷(上)』（一九七六・一二・一五）三二五—三二六頁。
- (3) 『読売新聞』月曜附録（明治二八・九・一六）。注1の拙稿二頁参照。
- (4) 三枝和子氏は、『ひとひらの舟 樋口一葉の生涯』（一九九二・六・三〇 人文書院）に於いて、作家一葉の「特色」を「いわゆる父の庇護のもとにある令嬢作家、夫の庇護のもとにある閨秀作家ではない」ことに見、「半井桃水を単身訪問することにしても、父の娘、夫の妻ではできないことである。何事も自分一人の判断で実行できることには、あえて言えば経済的苦労を超え、る意味があつたのではなからうか。」「一家の戸主であることは、女性をかぎりなく自由にする」などの見方を提出した（「あとがき」一八六—一八七頁）。また、「二七年一月」と表書にある一葉の雑記「つゆしづく」（感想・聞書5）には、「すがれよとまねく袂もうかりけり ひとりやたゝんだゞひとりにて」という歌が書かれている（『樋口一葉全集 第三卷(下)』七四四頁）。
- (5) 『樋口一葉『ゆく雲』試論——心のゆくえ——』『淵叢』第一号（一九九二・三・一 淵叢の会）三三—三四頁。本論に於ける菅氏の説の引用はすべて当論文により、以下、掲載誌の頁数のみ示す。
- (6) 半井桃水が一葉の死後に発表した文章の中で、一葉の生前、次のような忠告をしていたと語っている。

女史が私に送られた手紙を見て、何か凡ならぬ関係でもあるやうに思ひたる人もあつたので、常に私は女史に向ひ、斯いふ事を警告した、男は對話で打解けても手紙の上では打解けぬが、夫に反して御婦人は對話の時は打解けず手紙の上で打解

ける、夫ゆゑ艶めかしい文字を列ねて往々あらぬ疑ひを招ぐやうな事も起る。貴嬢あなたほどの文章家でも此の欠点は免かれぬ、
好く／＼注意せられたいと、(後略)

(「一葉女史の日記に就て」『女学世界』第二二卷第一号(明治四五・八・一 博文館)初出。)
一葉が、彼女の行動を強く規制する存在を家庭の中に持たなかったことから、比較的自由に筆を執ることが出来たとしても、その手紙は世間の人々の好奇心を刺激しやすいものであった。手紙に限らず、一葉と『文学界』同人達との交際についても、後年馬場孤蝶が、

(前略) 私の考から言ふと、女が男の所に来たり、男が女の所に行つたりすると、いつも普通以外の関係のあるやうな噂を立てると云ふのは、甚だよくない事と思ふ。ツマリは、男が女に対し、女が男に対する事は、男が男に対し、女が女に対すると、同じ様な場合がいくらもあるといふことを、世間で認めて貰ひ度い、苟も筆を執つて世に立つ程のものは、それ位の清い交際の出来るものであるといふことは認めて置いて貰ひ度いのであります。(後略)

(「故一葉女史」『明星』卯年第八号(明治三六・八・一 新詩社)初出。)

というふうに訴えている言葉などから、当時の世間の感覚というものが窺える。桃水と孤蝶の文章の引用は、『全集樋口一葉別巻 一葉伝説』(一九九六・一一・一 小学館)一九五―一九六頁、及び、二八五頁に拠る。なお孤蝶の文章の原文では、引用箇所2行目の「ツマリ」以降、すべての文字に圈点を付すが、ここでは省略した。

(7) 引用は『女大学集』(一九七七・二・二五 平凡社)五〇頁。萩原乙彦編『新撰女大学』(明治一三年)第十節(『女大学集』一六五頁)など、明治期の女大学にもこの内容はそのまま踏襲されている。女大学の諸本、及び『女大学集』については、注1の拙稿参照。

(8) 「田沢稻舟」は、『東京朝日新聞』(一九三七・三・二七―四・二二)初出。本論での引用は、長谷川時雨著、杉本苑子編、岩波文庫『新編 近代美人伝(下)』(一九八五・一二・一六 岩波書店)一三三頁に拠る。

(9) 「読む」ことによる覚醒——『軒もる月』『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』(一九九七・四・一 新曜社)所収、三

〇四頁。

(10) 網野菊の私小説『ゆれる葦』(昭和三九・八 講談社)には、女学校時代の出来事として、叔母の家に下宿していた大学生から手紙をもらった時のことが、次のように描かれている。

(前略) 一度だけ、此の大学生から手紙を貰ったことがある。うす緑色の角封筒に、きれいな細いペン字で書いた彼の名前を見た時、私の胸はときめいたが、その手紙は早速、両親の手にとりあげられ、両親立会いの上で開封され、読まれた。別に大した意味の文面ではなく、彼の大学の運動会の招待状が入って居て、そのことについて、長々、こまごまと書かれてあるにすぎなかった。だが、両親は、「若い娘にこんな手紙をよこす男はけしからん。」と、怒り、運動会へ行くことは勿論、返事を出すこと、まかりならん、と私に禁じた。(後略)『網野菊全集 第二巻』(昭和四四・五・三〇 講談社) 五七頁。)

(11) 吾妻は、与次兵衛が無実の罪で座敷牢に押込められているのを案じて訪ねて来る。お菊の足音を与次兵衛のものと間違えた吾妻が、「わたしが心に思ふことこまぐ」と此文に有。とつくと読んで自筆の返事見ますれば。今生の本望と塀ごしに投こんだ文をお菊が拾う。その場で手紙を読んだお菊は吾妻に対面し、「こなたを女郎かと思へば鬼か天まか」「いきけいせい」の恥しらずと罵る。しかし、命を捨てる覚悟の吾妻の訴えを聞き、その「心ていいが」とい、心を解いたお菊は、「ぬしも定めしあひたからふ。沙汰なしにそつとあはせましよ」と、夫と吾妻を引きあわそうとする。引用は、『近松全集 第十巻』(一九八九・二・一〇 岩波書店) 三五六、三五八、三六〇頁に拠る。

(12) 人づての手紙というのが実際によく行われるものであったらしいことは、『通俗書簡文』の文例からも窺える。

(13) 関礼子氏に、「お初には、『心中天網島』のおさんと小春の間にみられるような「女は相身互ひ」(中之巻)という家婦と遊び女の間に存在した相互了解が訪れる可能性はありえないだろう」という指摘がある。(「記号化されざるもの——『にぎりえ』」前掲書(注9参照) 所収、二六一〜二六二頁。)

(14) 「年始の状と暑中見舞の交際」(『樋口一葉全集 第一巻』五〇七頁)という言葉があることから、お縫の方からもそういう簡

単な挨拶状を送った可能性は想定できる。

- (15) 滝藤満義氏「『ゆく雲』から「うつせみ」へ——小説の発想」『一葉文学 生成と展開』(平成一〇・二・二〇 明治書院)、山本欣司氏「樋口一葉『ゆく雲』論——「冷やか」なまなざし——」『日本文芸学』第三一号(一九九四・二・一五 日本文芸学会)など。

※本論文中の傍線・傍点などは、特に注記がないかぎり、論者に拠る。

※引用文献全般にわたり、字体を現行のものに改め、濁点を補った箇所がある。また、ルビは適宜省略した。

(本学助教授)